

健康から見た災害対応 フェーズの壁を無くすには

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター研究員

高岡 誠子

2018年7月に人と防災未来センターに着任するまでは20年間、病院の救急分野で看護師をしており、その間に国内外の災害医療支援活動をいくつか経験してきました。これまでの災害現場での活動の多くは、主に急性期と呼ばれる発災後から1週間の期間中がほとんどでした。

そのため、被災した方々が復興していく社会の中で、自らの心身の健康をどのように守り、生活をされていたのかをほとんど知りませんでした。そんな時に、人と防災未来センターの研究員募集を知り、現在に至ります。

現場の実践者から研究職への転身は勢いと勇気が必要でしたが、医療分野とは異なった方々との出会いや、幾つかの災害対応や被災者への支援を見聞きすることで、幅広い視点や考えを持つ機会を得つつ、自分に何ができるのだろうかと問いかける日々を送っています。

“災害関連死を防ぐ”とよく言われますが、まずは、その前段階での健康への弊害を小さくしていく取り組みが必要です。それには、医療・保健・福祉の壁を取り払う必要があります。

現在の災害対応時の保健医療分野では、発災直後には命を守る医療支援活動が始まります。次に保健師などにより、健康を守るために避難所生活者への健康指導や衛生環境を整える取り組み、在宅避難者を訪問する保健活動へと移行しています。福祉に関しては、福祉サービスを利用されていた方への接触から始まり、普段サービスを利用されていない方への訪問は遅れてしまう現状があります。

このような支援側のフェーズにおける活動の移行ではなく、被災者視点から考え、発災後に同時期から医療・保健・福祉が協働して動き出すことが重要です。被災当初から、今後の被災住民の健康を守るためのロードマップを描き、先を見通した医療・保健・福祉分野の活動ができる応援要員の要請や調整が必要です。実践するためには、どのような仕組みや調整が必要か探求していきたいと思っています。